

會



報

1957年3月

191

日本山岳會

中共の登山界

—— 太白山登頂記 ——

古市美津雄

中共の登山運動は、中共政府の指導下、国防スポーツの一環として取上げられ、ようやく活動期に入った模様で、昨年は四月、太白山（四一三メートル）登頂、ムスタン・アタ（七四二四メートル）登頂に、それぞれ成功し、日本のマナスル登山成功に刺激されて、日本の装備と技術導入の意図のもとに、日本山岳会に向つて技術交流の申入れが行われたが、これは中共登山界最初の四〇〇〇メートル級登頂記録の要諦である。旅行家一九五六年六月号所載「攀登太白山隊員師秀氏記」から――

中華全国总工会登山隊は、一九五六年四月二十五日、ソ連人二名の指導下に、太白山の初登頂に成功した。標高四一三メートル、中共登山界の新記録である。

太白山は、太乙山ともいわれて陝西省郿県の東南方に横わる、秦嶺山脈の主峰で、山脈は西から東へ、鳳凰、留具一帯にのびて、全体的にはゆるやかだが、太白山のみ、突出して、六月にもなお雪をいたで、碧空にそびえ立つ魅力的な山で、唐朝の李白、宋朝の蘇軾らの詩歌にもしばしば唱われた名山である。

隊員は三十五名、その中にはソ連人二名、カメラマン二名、体育

学院の運動生理研究生二名など含まれていた。

一行は四月二十日朝、列車で北京発、二十一日夜一時鄭州着、二十二日鄭州から、渭河を渡り、渠城を経て、東南方へ行進、山麓の營頭着、二十三日朝營頭発、劉家崖を経てよい山にかかった。

ほとんど四五度の急坂である。樹木うつそう、百花咲きみだれて鳴きわたる小鳥の声も楽しい。主峰は前景の群山の上に、高々とそびえたつてゐる。

日光の直射するどく、二五キロのルックサックが肩に重い。みんなシャツ一枚になつた。山にかかつて約一キロ半、中山寺という寺があつた。たまたま寺院の修理に當つていた村民たちに「われわれは太白山に登るんだ」と話したが、彼等は「とてもそれは難しからう、六月前にこの山に入つたものはいません。現在まだ山頂近くには六、七メートルの雪があるだろう」とのこと、われわれはそれを登ることを専門にしているのだと話しても信用してくれない。「やめたがよい、足をすべらせたら生命がない」としきりにとめた。

そこからおよそ二十数キロ、午後七時半に独母宮という庵に着いた。ここにはもう残雪があつた。気温もぐと下つて摂氏零度、夕食の仕度にかかった頃、小雨が降り出した。庵もボロボロで、しきりに雨もがした。シラフザックがかなり濡れた。夜半北風吹きつた。雨はいつの間にか雪となつた。そして翌朝も降りつづいた。

一日の間に春夏秋冬の四季を体験した。

われわれは相当強行軍した。二五キロの荷物を背負つて、毎日十一時間から、十二時間歩き続けた。平均五十キロの踏破であつた。山にかかつて高山病にかかるものも出たが、みな斗志満々、元気だつた。

廿四日朝九時、雪もやんだ。十時五分出発、約十二キロを登つて、平安寺着、小憩して、また十二キロ、明星寺に着いて、昼食、劉家崖から明星寺までは、山の竹などを切り出す村民に時々出会つたが、明星寺から上では、誰一人にもあなかつた。

雪はもう三十センチくらい、前行者の足跡をたどる。放羊寺に着いたとき、まだ日が高かつたが、われわれはここで十分休養をとることにした。高度約四〇〇〇メートル、太白山の頂上は目の前である。

四月二十五日朝、体育学院の研究生たちは、隊員の健康診断を行った。朝食後われわれは、体育学院の研究生はか一名をのこして、全員三十三名、勇躍放羊寺発、最後の登高にかかった。

白樺と、高山植物が点在する山麓に、われわれは珍らしい高山バラを発見した。雪を踏んで十二キロ余、雪と岩場の連続で、もう一本の草木も見られなくなつた。やがてのしかかるような雪底に直面した。その上が頂上だ。

頂上を仰いで一息いれた。そしていよいよ最後のアタック！ 午前十一時十五分、全員遂に太白山の最高点に到達した。

標高四一三メートル、中国登山界最初の登高記録である。

われわれ期せずし萬才を叫び、野獸を防ぐため携行した十挺のカービン銃を一せいに連続三発、大空に向つて発射し祝賀した。山頂で昼食、隊員の署名と記録を、皆結の空缶に納めて、これを記念に埋めた。★

☆お願い☆

本会の会費は年額八百円（支部費別）であります。これで会の運営一切がまかなわれることになつております。会報、小集会その他各種通知状の発送、山岳の発行、ルームの維持費などがあります。これらを年額八百円月割り六十七円でまかなうことは余程切りつても難事であり、山岳は五十年につづき、直ちに五十一年の編集に着手しております。

会の運営資金はもちろん会費以外山日記の編集その他会員の労力奉仕によつて獲得しておりますが、その大宗は会費収入によるのが原則です。ここに会費ならびに入会金の増額についてお諮りする次第です。会費は年額千円、入会金は従来の五百円を千円とすれば大分案になります。ご意見をおよせ下さい。

★登山運動は、わが国のもつとも新しい運動種目の一つである。しかもわが国は、いたるところに未踏の高山がある。国境のヒマラヤ山脈には、十数峰の八〇〇〇メートル級の巨峰が連なり、われわれの登高を待っている。

厳冬の燕から奥穂高へ

農大山岳部

戦後一九五一年初早月尾根、一九五二年燕より槍、一九五四剣北仙八尾根など飛躍への絶えざる準備は部員として計画の中へ常に心して来たのである。国内の山で冬期において初登攀が得られぬ現在より大きなより困難なルートその目的の山に登頂するというところを前進を目指すのが部の最も望むところ、かくして一九五六年度の冬山の目標として冬山総合技術の習得、新人養成、チームワークの養成などの点から燕岳奥穂高間の往復縦走が取上げられた、当部において五二年に同コースの計画が行われたが槍で止まった。われわれはさらに一歩前進を目指したのである。このような部員のあくなき闘志と団結によつて大なる成果を上げることが出来たのである。今期冬山は三十一日間で行行したが、天候の不順、計画自体の無理、隊員の不調などで全行程に支障をきたしたことを反省している。

タックに成功した。
 △隊の編成
 (A隊) 矢田部博夫、柴田寿央、石川寛成
 (B隊) 加藤武、寒河江誠、千葉富夫、安川稔
 (C隊) 村井田博、伊藤十士夫、木村長仁、三浦俊二、高見沢昇、林隆聰、桶政治、松田滋、佐々木孝子、前多邦江
 △行動概要
 (昭和卅一年十二月、卅二年一月) 十二月二日 先発隊四名出発、百瀬宅に入る。
 三日 先発隊餅つき。
 四日 先発隊餅つきおよび梱包
 五日 本隊村井田以下十四名出発。先発隊有明駅まで運搬、後に佐々木、大内隊員帰京。
 六日 (晴) 先発隊一日市場にて本隊と合流、全員で有明よりBH中房温泉に入る。A隊合戦尾根第一ベンチまで偵察。
 七日 (雪後風雪) 風力S・E五十四名にて合戦尾根ボッカ、第二ベンチより積雪増加しB隊先行合戦小屋にデポし引返す。石川以下二名風邪の為休養。BH(七・〇〇)第一ベンチ(八・〇五)二十五(第二ベンチ(九・一〇)二〇)材木置場(十・三〇)五〇)デポ地点(一三・四〇)一四・二五)BH(一六・一〇)
 八日 (雪時雨後風雪) 風力NE四 加藤以下四名C1設営附近まで荷上げ、デポしてBHに入る。他は合戦小屋にデポして下る。石川以下三名風邪、休養。BH(七・〇〇)合戦小屋(一二・〇〇)四五)三角点(一三・二五)C1

(一四・三五)五五)BH(一六・三〇)
 九日 (雪後風雪) 風力N四 C1設営、工作隊加藤以下二名C1に入る。他はC1までボッカ下る。不調な林、佐々木は途中よりBHに入る。寒河江以下六名風邪休養。BH(六・三〇)合戦小屋(一一・一五)四五)C1(一三・三〇)四五)合戦小屋(一四・一五)二〇)BH(一五・二〇)
 十日 (晴後風雪) N四 病氣回復した石川、木村、三浦が加わり八名でボッカ、石川以下二名は合戦小屋よりBHに下り、村井田外四名はC1まで荷上げC1に入る。C1の加藤、千葉は合戦小屋まで二回の逆ボッカ。寒河江以下五名は相変らず風邪を病む。BH(六・四〇)合戦小屋(一一・二〇)一五)五〇)C1(一三・四五)
 十一日 (快晴) 零下八度 風力NW七 寒河江、石川、三浦の三名合戦小屋までボッカ。村井田以下七名、C1よりデポ地点合戦小屋まで逆ボッカ二回。林以下五名BHには休養。C1(六・四五)合戦小屋(七・二〇)八・一〇)C1(九・三五)一〇・三〇)C1合戦小屋(一〇・五二)一・三〇)C1(一三・五)
 十二日 (快晴) 零下五・五 風力NW二 工作隊加藤以下三名はC2設営予定地牛首コルまでボッカを兼ねて向う。大天井までは殆ど途中米のフィッシュ一本をするラッセル約四〇センチ。村井田、柴田、高見沢、佐々木は第一回の合戦小屋までのボッカ後無往復し、十一時半より二回目の逆ボッ

カ。合戦小屋にてBHより来た寒河江以下四名の隊員と合流。C1に初めて隊員、荷物集結。不調な三浦、松田、木村、伊藤の四名中房より下山。C1(六・五〇)合戦小屋(七・二〇)八・〇〇)C1(九・二五)一〇・二五)燕頂上(一一・〇〇)一・一〇)C1(一二・三〇)三五)合戦小屋(一二・〇五)一四・二五)C1(一六・〇〇)工作隊C1(七・一〇)大天井(一〇・二〇)C2(一二・〇〇)三〇)C1(一五・一〇)
 十三日 (曇後風雪) 零下十五度 風力W三 村井田以下十名C1C2間のボッカ。雪庇殆ど中川谷側数カ所夏道なく水保川側を巻く天候の悪化登高に困難をきたしていたが大天井トラバースに入り風弱まる。牛首コルが見える附近からクラスト。午後より物凄風雪。蛙岩はC1C2間の唯一の風の当らぬ休場と知る。キーパー林以下二名。C1(七・一五)蛙岩(七・四五)八・〇〇)切通岩(九・四五)一〇・〇〇)牛首エールC2(一一・四〇)一二・二〇)切通岩(一二・五〇)蛙岩(一四・一〇)C1(一四・三五)
 十四日 (風雪) 零下十六度・五度 風力NW七・八 停滞休養。十五日 (大風雪) 零下十八度 風力N四、B隊四名C2建設に風雪中をのり出、続いてAC隊六名出発。天候悪化してAC隊切通岩手前にデポして引返す。B隊は苦闘の末九人用ウインパーを牛首コルに設営。C1(七・四五)蛙岩(八・〇〇)八・一五)切通岩(一〇・一〇)三五)蛙岩(一一・四

五)C1(一二・〇七)
 十六日 (曇後風雪) 零下二十度 風力N五、桶、佐々木、前多に石川、林の両名が付きC1より中房に下る。A・C隊村井田以下三名でC2にボッカ。午後大風雪となる。大天井の突風に驚く。ラッセル六十センチ内外。C2のB隊四名切通岩先方のデポ地間の逆ボッカ。C1(八・〇〇)蛙岩(八・二〇)三〇)切通岩(一〇・一五)三五)C1(一一・四五)一二・二〇)蛙岩(一二・一〇)C2C1(一四・三〇)
 十七日 (大風雪) 零下十四度 風力N六 A・C隊停滞。B加藤寒河江、千葉、安川はC3ボッカに向うも天候悪化し赤岩手前のピークより五百米下デポし引返す。C2(七・二〇)デポ地点(一二・〇五)C2(一四・一〇)
 十八日 (曇後吹雪) 零下十七度 風力N四。C1にキーパーを置かずA・C隊全員C2に入る。B隊四名C3設営地点西岳まで第一回目的ボッカを試み暗くなつて帰幕全員(十名)C2集結。C1(九・三〇)蛙岩(一〇・一〇)C2切通(一二・一五)三五)C2(一四・三〇)B隊C2(七・二〇)赤岩取つき(一〇・二〇)三〇)西岳小屋横(一四・三〇)一五・〇〇)C2(一七・二〇)
 十九日 (風雪) 昨日で荷百九十貫C2に集結。キーパー高見沢を残し他の九名C3建設に向う。牛首ピーク直下で二ノ俣谷側を巻き尾根通しに第一鞍部までトラバースより第二最低鞍部までトラバース胸までのラッセルに苦しむ。一段

登った鞍部にて猛風雪のため前進を断念、ザックごとデポして引き返す。C2(七・四五)デポ地点(九・二〇)C3(一〇・四五)。夕食時ラジウスの不調全員ガス中毒。

二十日(曇後風雪)零下十五度風速十五米。村井田以下八名でC3幕営とボツカに向う。デポ地点より天文側を巻き、強風のため雪の無い夏道に出る。赤岩手前まではスムーズな登高、コルより赤岩ピークを指して攀上る。これよりこの稜線最悪の場所デフィックス

二本(各々三十米)を固定する。西岳の登りにかかるリッジはさけるB隊C3幕営、A・C隊C2に引返す。C2キーパー高見沢。C2(八・〇〇)デポ地点(九・〇〇)C2(二・〇〇)赤岩(二・一〇〇)C3西岳(三・三五)一四・〇〇)C2赤岩(一五・四五)C2(二六・二〇)

二十一日(大風雪)零下十七度風速二十五米。停滞する。二十二日(風雪)零下二十度。視界全くきかず停滞する。二十三日(風雪)零下二十三度

二十四日(曇)天候回復、キーパー高見沢を残し、A・C隊C3に向う。稜線連日の強風でラッセル少なく、登高比較的容易。C隊村井田、林C3に入る。B隊はキイポイント東鎌のボツカに入る。積雪量多くまた雪庇積沢側に数カ所出ている。ルートは殆どリッジ通し。窓に三十米フィックス一本鎖場より二時間登りデポす。A・C隊C2(七・三五)赤岩コル(一〇・二〇)三・五)赤岩ピーク

(一一・〇〇)C3(一二・二五)一・二五)赤岩(一三・三五)C2(一五・〇〇)B隊C3(八・〇〇)水俣乗越(一〇・三〇)四〇)鎖場上部デポ地点(一三・一〇)C3(一五・〇〇)

二十五日(大風雪)A隊矢田部、石川、柴田猛吹雪の中を行動するも途中デポして引返す。二十六日(風雪)零下十八度風速二十米。全員停滞。現在の前進状態では前途に不安を感じず。午後天候回復の徴。

二十七日(快晴)風速十米。A隊キーパー高見沢を残しC3に向う。赤岩手前のピークで逆ボツカにきた加藤、林に出会う。A隊C3に入る。村井田、寒河江、千葉安川の四名槍ノ肩までボツカに出る。アプロッチあり、積雪量も多く悪い。大槍小屋建設地附近より上部クラストした夏道を行く、梯子場附近思つたより悪くない。全員C3集結。A隊C2(七・二〇)赤岩(一〇・〇〇)西岳登り(一〇・五〇)一・二〇)C3(一一・四〇)B隊、C3(七・四五)水俣乗越(九・一五)三〇)窓(一〇・〇〇)鎖場(一〇・二〇)四・五)デポ地点(一一・三〇)四・五)槍ノ肩(一三・一五)一四・〇〇)窓(一五・三〇)水俣乗越(一五・三〇)C3(一六・三〇)夜、作戦会議が開かれ細部打合せ。最悪の場合でアタック隊C3帰幕期間は後十五日間とする。

二十八日(曇後風雪)前進隊よりC隊槍アタックに先立つ。前進隊安川不調、寒河江と交代してキーパー。午後風雪となる。梯子場

手前で帰路のC隊と会う。C4アタックベース幕営、集結出来る。前途に希望。C隊C3(七・二五)水俣乗越(八・一〇)窓(八・四〇)デポ地点(九・一五)三〇)槍ノ肩(一二・四〇)一三・〇〇)槍頂上(一三・二〇)窓(一四・四〇)水俣乗越(一五・二五)C3(一六・二五)前進隊C3(八・二〇)水俣乗越(九・二〇)窓(一〇・二〇)デポ地点(一一・四〇)一三・〇〇)C4(一三・四五)。

二十九日(快晴強風)。思いもかけぬ快晴、A・B隊C5設営に南岳に向う。信州側に大きな雪庇大喰、中岳、南岳とクラストした稜線にアイゼン利かす。中岳の下リラッセルある。雪煙も美しく穂高周囲の展望は素晴らしい。南岳を下り第二鎖場上部のテラスにC4幕営、B隊寒河江、千葉C4に帰る。アタック態勢整う。C5(八・二〇)中岳(一〇・〇〇)一〇)南岳(一一・一五)三〇)C5(一二・三〇)。

三十日(晴)零下十六度。アタックに絶好のチャンス。夜の明けの待ち、アタック隊柴田、石川、サポート矢田部、加藤はライトを手に出発。鎖場は鎖が出ており容易に下降、殆どリッジ通しに夏道を辿る。悪場と目された大切戸は部分的な悪場を除き、滝谷側からの強風に雪も少なく容易に通過した。北穂の登りは岩稜と堅くクラストした雪面をリッジ寄りアイゼンを利用して高度をかせぐ。北穂頂上で一息、時間と天候状態など見合せサポート隊と共に奥穂へ向う。北峰南峰のコルより

南峰は滝谷側ルンゼを登る。涸沢槍、涸沢岳は夏道を通り穂高小屋に着く。最後の壁の登りも困難なく、霧水咲く大願の奥穂頂上に立つ。互に手を取り合い感激す。帰路は跡跡を辿り慎重に下る。北穂で岩稜会パーティと逢う。北壁は悪くアンザイレンして下る。疲労多ければ大切戸に注意し、無事に入る。C5(六・〇五)大切戸(七・〇〇)北穂(八・一五)三〇)涸沢槍(八・四五)涸沢岳(九・二〇)穂高小屋(九・四五)一・五五)奥穂頂上(一〇・三七)一・一〇)涸沢岳(一二・一〇)大切戸(一三・〇五)C5(一五・五五)。

三十一日(曇後風雪)。次第に悪天候となる。視界全く利かず中岳からしばしルートを失う。隊員総バテとなりC4にこるげ込む。C5撤収完了。C4(一〇・五五)中岳(一二・一五)二〇)大喰(一六・〇五)C4(一六・三〇)。

昭和三十一年一月一日(快晴)C4撤収。四十余貫の器具は六名の肩を痛める。窓のフィックス撤収。安川、林迎えに来る。C3下のルンゼ雪崩の心配あり一人一人登る。村井田上部で迎える。悪場の東鎌を越しC3に帰つたのである。C4(九・四五)窓近い休けい地(一二・一〇)二五)C3(一四・三〇)。

二日(高曇)C3・C2撤収、連日の晴天でC2ルートは硬く。赤岩の悪場も無事でC2に着く。高見沢感激。C1直ちに撤収。大天井のトラパス悪くひざまでのラッセル。薄暗くなつて為右衛門の悪岩場を通過。鞍部は中川谷より雪庇が出ており慎重になる。この鞍部にかかる頃から天候崩れ、ライトを頼りに風雪の中でC1に向う。C1に着いた時は八時も過ぎていた。関西登山会のパーティがいた。C3(八・〇〇)赤岩(一〇・二〇)四・〇〇)一三・〇〇)一四・二〇)切通岩(一五・四〇)C2(二〇・三〇)。

三日(快晴強風)C2撤収してBHを目指す。合戦尾根の雪量多く、連日の晴天で雪がベタつき、思つたよりラッセル少ない。でも、三角点下部などのように腰までのラッセルは部分的に多い。林、高見沢不調だったが、午後二時過ぎ全員中房BHに帰り着く。C1(一〇・一〇)合戦小屋(一一・三〇)五・〇〇)BH(一四・四〇)。

四日(雪)疲れた体を休める一日休養。五日(曇)御世話になつた中房と別れ十名揃つて帰京の途に着く。バス道路固くラッセルなし。途中、加藤OB、前多らの出迎えを受ける。(村井田博)

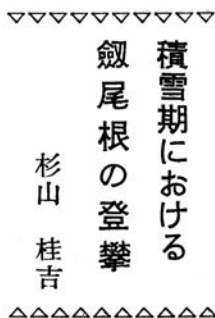
山岳第五十一年

山岳第五十一年は山崎理事が編集を担当、大馬力をかけております。主な内容は横有恒氏のマナスの印象、沼井鉄太郎氏の日本山岳会五十年史、日高信一郎氏のギド・レイの職訳タルランの死、田口二郎氏の伊藤惣氏の追想などです。ご期待下さい。

積雪期における

劔尾根の登攀

杉山 桂吉



劔岳の西面で最後まで取残されたところといえば、それは池ノ谷であり、劔尾根(池ノ谷尾根)はその池ノ谷を右と左に区分し、急峻さを持つてその頂点を長次郎の頭まで延ばしている。この劔尾根は、その尾根自身夏季においては岩登りとしてはあまり対象とされず、むしろ彼が持つていっている「ドーム壁」(右俣側)及び彼が従えている池ノ谷右俣奥壁にクライマーの足跡が印されている。

なぜこうかという劔尾根の末端は非常に急でブッシュが多く夏期など、とても登攀の興味が湧かないからなのである。

なお、この尾根にはじめて登つたのは一九三四年八月二十日立教の湯浅巖、浜野正男、山本正成氏のパーティが右俣に入り、クレパスのため引返し劔尾根支稜よりドームを越して長次郎頭に至るとなっている。

われわれが一九五二年度の春期合宿を劔岳および八ツ峰、源治郎劔尾根に選定したのであるが、劔尾根はそのころの実力および装備の点からいってその上半ともしられる部分のみで打切らなければならなかった。

こゝでわれわれの劔尾根上半について行動を見てみよう。上半といわれる「ドーム」より上は、

積雪期においてもそれ程むずかしいところはない。まず出発点の劔岳頂上のテントより始まる(池ノ谷、劔尾根などのAC時の三ノ窓が良いのだが)劔岳頂上から長次郎の頭までの下りは雪の状態によつては少し悪い。コルから長次郎の頭を経て何のことなく池ノ谷乗越(熊ノ岩乗越)に至ることが出来る。雪量はひざを没する程度、池の谷乗越から八峰に向う岳友は腰までも雪をかきわけて降りて行く。われわれはそこから夏はガラ場である三窓のルートを降り始める。そこは雪がしまつていて、全然もぐらず自然と鼻歌が出て来る程快適だ。三窓へ着くとそれが一変して腰ままでのラッセルで降る。雪崩を気使つて早く尾根の取付きまでと思つたが、なかなか自由に進めない。やつとのことで池ノ谷尾根の末端に着いた。全身がむさされるような暑さだ、目の前にドームの壁、あとは長次郎の頭附近より落ちていける沢を少しつめれば良いのだ、こゝで雪崩にあつたらお終いなので取付まで数分の間、全力を挙げてラッセルし進行のペースを早めた。

登り出しは、前年の夏登つたクローアルの形態をした大きなスラブ状のところにし、こゝでザイルを結び合う。そこは急ではあるが、雪が一面につまづいて嬉しむことには、雪に足をけ込むことにより、あるいはピッケルを雪面に突き入れ、それが良い確保となることである。本当にこゝは雪がしまつていて。若し雪の状態がこゝでなく腐つていたらおそらくは登れない。若し登れたとしても非常な困難をとらなつたであらう。たゞリッジに出るところが岩に薄氷が張つていて悪い。リッジに出たところは、アレイトでまたいたまゝ息をとゝめる。とがついているので尻が痛くなる程だ。こゝは前方のリッジより一段低くなつていて進むためにはそこまで上が。わずかな所なのだけだ、夏のようにすぐには行けず悪い場所である。それは足のホルドが不安定で、手のホルドが無いからである。岩には薄氷がエナメルでも吹き付けたように密着していて始末が悪い。ハンマーでたゞいてみたが受附けない。勿論ピッケルは無用の長物というところ、でも岩でなきそな所を、ハンマーで、ホルドを作り、半分すりぬけながら、なんとか乗り越える。東面の八ツ峰や源次郎のリッジではあんなに雪が多いのに(深いところは腰あたりまで)こゝは雪はあつても、あまりもぐらない、おまけに岩に薄氷がついていけるからいやだ。平な岩ではもうようにな歩かないとする。アイゼンがいやな音を立てる。この調子だとずいぶんかかるなとそろそろ時間が気になる。でも夏はこゝからわけなかつたはずだ。それからは殆んど左俣側のリッジより少し下を登きながら登る。雪質は固く傾斜は足首が痛くなる程急である。ステツプを切ろうとして足上げると墜落しそうなのでなかなかうまくゆかない。最後にはピッケルでそつと切りながら進む。アイスパイルまで使うこともあるまいが今あつたら非常に楽だ。たまたにリッジの上

上ると早月尾根の稜線を劔岳頂上へ向う岳友の姿が見える。互にヤッホーをかわし合う。きようは本当に良い天候だ、前方に劔尾根の頭がキラキラ輝いて見える。ちやうど槍岳を曲げたようなかつこうをしていける。前記のような登攀を繰返して、その頭の下までくる。劔尾根の頭までの登りは左へ捲きながら登る。雪の斜面だ。

一歩一歩登り始める数時間、いや数十分とはちがつた心地良い登りだ。あたりの景色はほめたたえながら……

劔尾根の頭に立つと長次郎の頭をすぐ目の前にみることが出来る。さつき早月尾根を登つて来た連中が劔頂上からカニのハサミを経てテントに帰る姿が見える。劔の尾根の頭から長次郎の頭まではわけはない。取付から六時間、殆んど休むことなくしに長次郎の頭へ出た。長次郎の頭でビスケットを食べる。あまり食欲がない。

八峰の頭を見ると八峰へ行つた連中が休んでいるのが見える。止つていて寒さが身にしみるようになつてきた。奴らは知らないけど、こゝでそつと待つていてやることにしよう。

明治座の穂高 古沢 肇
明治座二月興行、新国劇で、北条秀司作「穂高」が出た。大学山岳部の冬山遭難事件を、とり上げたのが珍らしい。一人息子を雪崩に奪われた医学博士の父親(島田正吾)が、急を聞いて馳せつけた麓の宿(穂高館)で、別れた妻と落ち合つて、よりが戻るといふまでの話。二幕六場のうち、一幕目の三場が夢の場で、父親と死んだ息子とが雪の穂高の尾根の上で、しみじみと語り合うところ、照明の効果も上つて、月光に冴えた雪の感じをよく出している。

大詰は、宿の玄関前で、大詰にふさわしく眩しいばかりに晴れ上つた雪景色である。総じてこの芝居、大道具が「写真」のわりには背景の雪の山が、銭湯のペンキ絵じみていゝのが、山を見慣れたわれらには不自然なものと、場所が、冷厳な冬の上高地だと思つて見ているせいか、人の出入りその他に、人里臭いところがありすぎるのが気になるなど、いわゆる、芝居のウソが目につく。しかし、大劇場で山登りを背景にした芝居というのは、恐らくこれがはじめての上演であるように思われ、そういう意味でなかなか興味があつた。

会員総会お知らせ

昭和三十三年年度会員総会は四月二十日午後二時からお茶の水岸体育館二階会議室で開催致します。万障お繰り合せの上ご出席下さい。

穂高岳白出谷

日大山岳部

今年度の冬及び春の山行は飛騨側から穂高を登るといふことから白出谷を中心とした計画が立案された。冬の計画はジャンダルム飛騨尾根の登攀と酒沢岳西尾根より北穂高往復であつた。参加者は二年部員以上のリーダー熊谷以下九名で期間は十二月十三日より廿七日までであつた。

今冬の十二月末は異常な悪天候が続き入山中一度も晴れることがなく連日の風雪に悩まされた。したがつて北穂高の往復はその機会がなく、ジャンダルム飛騨尾根及び酒沢岳西尾根から奥穂を登つた。

行動概要

昭和三十一年十二月九日先発隊四名は東京駅を出発。

十三日 本隊出発。

十四日(曇り) 先発隊は酒沢岳西尾根主稜の末端にBCを建設して入つた。本隊は槍見温泉に着いた。

十五日(雪) 本隊はBCに入る先発隊は西尾根を偵察。

十六日(雪) 昨日の行動により西尾根を主稜通し登ることはアプローチも長く、したがつた時間的に不利であるため一度白出谷を全般的に偵察した。その結果、BCを本谷の天狗尾根末端附近に移動し西尾根は支尾根から登ることとした。

十七日(雪) 全員でBCを本谷千八百米の地点に移動した。

十八日(曇り時々雪) 全員にて西尾根二千七百米のAC地点まで荷上げを行う。

十九日(風雪) 西尾根二千七百米にACを建設。北穂登頂隊の宮原、和田の二名とサポーターの一名がこれに入つた。ACの地点は蒲田富士と呼ばれている西尾根にあるピークの肩で、われわれが登つた側稜と主稜のジャンクシンになつてゐる所である。蒲田からの風が強く積雪がほとんどなく、樫松の上に設置した。それでも西尾根ではこの地点が設置に最も良いことが後でわかつた。

二十日(風雪) 停泊。

二十一日(風雪) 停泊。

二十二日(風雪) 西高東低の冬型が連日続く風雪の毎日である。きようは北穂高登頂最後の日であつたが朝から風と雪で北穂まで行くことが出来ず宮原、和田は西尾根を往復してBCに下り熊谷以下五名がACに入り、深瀬、菊地の飛騨尾根登攀隊は、グリーン・スピンドル上部まで偵察に行く。これで飛騨尾根登攀の態勢がなつた。

二十三日(風雪) 停泊。

二十四日(曇り後風雪) 登攀隊深瀬、菊地は下部サポーター隊宮原、和田と共にBCを出発。ライトの光を頼りにスキーで本谷を登る。しばらく行くといふは極度にせまくなり両岸からのデブリで歩き難い。天狗沢の出合附近は両岸が切立つており、深い沈黙の底といった感じである。

六時グリーン・スピンドル幕営地に着く。さらに二時間程で横断地点に達しサポーター隊と別れて、第二テラスより落ちるルンゼをト

ラパスして飛騨尾根に取り付く。リッジ通しは殆んど雪のついていない岩場でアイゼンでは非常に歩きにくい。ところどころ右側をまいて進む第三テラスに出た。第二テラスへの急な登りは左手のガリをつめ一旦白出側へ出てここでザイルを結び三ピッチで第二テラスに出た。第一テラスへの登りで右側ヘトラバースせんとしたが逆層のため非常に登りにくく、引き返してリッジ通しに登る。ハーケン三本を使用しした。第一テラスからはなんなくジャンの頂上に立つことが出来た。BCを出てから九時間廿分の行動であつた。

ACの熊谷以下五名は飛騨尾根登攀の合図を聞きACを出発。全員奥穂に登り熊谷、村上の上部サポーター隊がジャンダルムに向つた。途中馬ノ背は風雪のため視界がきかず予定以上の時間を要した。ロバの耳にザイルをフイックとして飛騨尾根登攀隊を迎えた。奥穂小屋で待つていた横田以下三名と合流して暗くなつた西尾根を下りACに帰つた。きようの行動で飛騨尾根登攀隊および奥穂に登つたパーティーの大部分が手および足を凍傷にやられた。

二十五日(風雪) ACを撤収してBCに帰る。

二十六日(風雪後曇り) BCを撤収して槍見温泉に下山する。廿一日から妙高笹ヶ峯で行うスキー合宿に参加するため一部の者は直接笹ヶ峯に向い、他の者は一度東京に帰つた。(熊谷記)

英国山岳会から招待状

来る十一月六日創立百年記念祭

を開催する英国山岳会から当会に對しつぎの招待状が到着した。

一九五七年二月二十八日
日本山岳会々長殿

アルパイン・クラブは今年創立百年記念祭を祝います。この山岳会でものようなことは初めてでしよう。委員会に代りまして本年十一月に当クラブの客として貴殿を御招待申し上げます。何卒貴殿がこの招待を御受け下さつて、二晩ロンドンの当クラブの来賓となつて下さるようお願い致します。宿泊の準備は出来ております。

若し貴殿が御出席出来ない場合には貴クラブの他の代表者を歓迎致しますが、その場合にはその方の氏名、住所をどうぞ御知らせ下さい。百年祭には過去百年に亘る当クラブの歴史を示す諸記録・写真・絵画及び記録文書などの展示会をロンドンの当クラブ本部で見せます。私はこの際、貴殿を歓迎致しわれわれクラブの間の関係を更に深めることはまことに意義深いことと期待しております。

色々と整理の都合もありますので出来れば、四月一日までに当クラブ・クラブの書記まで早速ご返事をいただければ有難く思います。

CENTENARY DINNER

Dear Sir,

This year the Alpine Club will celebrate the hundredth anniversary of its foundation, the first of any mountaineering club to do so, and on behalf of the Committee have great pleasure in inviting you to be

the Guest of the Club at the Centenary Dinner which will be held in London on the 6th November, 1957.

I hope that it will be possible for you to accept this invitation and also to be the guest of the Club in London for two nights at the same time. Accommodation will be provided. Should you be unable to attend yourself, I should gladly welcome another representative of your club, in which case I would be grateful if you would kindly send me his name and address.

It may interest you to know that at the same time there will be on view at the Club's headquarters at the above address an exhibition of records, paintings, drawings and documents covering the history of the club during the past one hundred years.

I shall look forward to welcoming you on this occasion and to renewing the associations between our two clubs, which we value so greatly.

An early reply to the Assistant Secretary, Alpine Club, to reach him if possible by 1st April, would be much appreciated, in view of the arrangements which have to be made.

With cordial good wishes,
Yours sincerely,

山・の・音・楽

辻 莊 一

(第一七五回小集会講演要旨)

きようこでは山の音楽についての論議をするつもりはない。山の音楽の漫談をして、その中に出てくる音楽の代表的なものを一、二披露したい。また会員今井嘉道氏から日本に一枚か二枚しかないレコードを提供されたのでお礼を申上げる。

山の音楽については皆様もお読み下さったと思うが河出書房から出された登山全書に書いた。あれ以後別に考えは変わらないし、あそこ書いたものよりきようの語は発展していない。しかしきようは皆さんに音楽をおきかせ出来る点うらしい。音楽の議論はゲーテのいったように灰色のものだ。そこで議論よりもなるべく新鮮な音楽をきいていただきたい。

まず音楽の種類に次の三種類に分けられる。

第一は山の人が生活の中に唱っている音楽。

第二は山に住んでいる人が楽しみに唱う音楽。かなり娯楽要素が多く、山に住んでいる人の民族音楽といつたもの、山に縁のある民族音楽で、これを何らかの形で手を加えた音楽でダンディの作曲したフランスの山の音楽をきようは皆さんにおきかせする予定である。どの程度に民謡を加味したものが芸術か、どの程度のものが民族音楽か、それぞれの人のみかたに

よって違ってくる。

第三の種類は、もつと登山というものと精神的、内面的な関連を持つてゐる音楽で、月並かも知れないが、ペーラーヴェンの第九交響曲の第一章をきようは持つてきた。この音楽は少くとも登山をやつた人ならすぐ理解が出来ると思う。むずかしくいうと山登りの精神の具体化されたものである。いまいつた三つの種類に入らないものがある。一番よい例がドイツのリヒャルト・シュトラウスの作つたアルプス交響曲である。この曲はまことに壮ごんにはちがいないが、ペーラーヴェンの第九とは格段の違いがある。芸術というものではない。例えば小説は物語りものではないが、現実の物語りものではない。作家の人生観、社会観がそこに現れているのである。ここが小説とルポルタージュのちがうところである。まして音楽は音だけである。音で物語りをしようというのは無理である。音楽で物語りをしなければならぬ時はこれは何と思ふと約束ごとを沢山作る。これを大胆にやつたのはペーラーヴェンをフランス風にしたペーラーヴェンである、ワグナーである。符号をもてあそんでいるのである。一度とか二度だけきく時は好奇心を満足させる。こういうものは小学校の唱歌にある。『時計』とか『村のカシ屋』と同じ立場に立つもので芸術品とはいえず、少くとも私の考えでは音楽とは申せない。

要するにシュトラウスのアルプス交響曲とか家庭交響曲などは一

時の流行である。近來そういうものはやつていないしレコードにも作られていない。山登りは一時の流行ではない。山岳会の皆さんのお耳には入れないことにする。

また山に関する文学を音楽にしたものがあつた。ハンガリー生れたドイツをまたにけう活躍したフランク・リストのユエーゴの山の上というものもあるが、これもシュトラウスのものと同様きようは割愛する。

きようは山の人の音楽、歌、これを芸術的に加工した音楽の中で割合にひくいもの高いものをお聞き願つて最後に山登りの精神を歌つてゐるものとしてペーラーヴェンの第九を聞くことにしたい。

まずはじめにスイスの山ふところにご案内する。これはご承知のようにスイスでは家畜を山でやしなつてゐるのだが、春になるとその牛や、羊をアルプに追い上げる。このレコードに入つてゐるのは、秋に山から牛を追ひおろす音楽的風景である。遠いところでアルプホルンがきこえる。長い木で出来た日本のきせるを長く太くしたようなもので非常によい音がする。そのあいだに牛のきけた鈴の音があちからから、こちらからもきこえる。また村の人がわいわいさわいしている音もきこえる。

アルプホルンについては面白い研究が発表されている。一九一〇年ごろ世界中の音楽学者が集まり研究発表をしたことがあるが、この席でホルンボステルという比較音楽学者の研究で、これは戦前山岳会の会報に書いたこともあるがもう一度くりかえすと、彼は人間

の起源をパミール高原におき、ここから世界中へ人間が広がつていつたと説明している。その時チベットの笛を世界中に広めたものがヨーロッパアルプスではチベットの笛を来た人間が獣の角の中をえぐつてホルンというものを作り、また日本では修験者のほら貝となつたといつてゐる。つまり日本の修験者のほら貝とアルプホルンは同一系統のものである。この音が、パミール高原から人間が四方に出ていつたといふところはあやしいが面白い説である。

ではスイスの音楽の中心ともいふべきアルプホルンの上手にふいたのがあるからお聞き願ひたい。ヤッホッホッホと後に出てくるが非常にうれしい時に出す声である。アルプホルンは楽しみとともに実用も兼ねてゐる。誰はどういうメロディを持つており、きようはあそこ誰がいてるかということがある。家畜も利口なものになると主人のホルンのメロディをききわけそこ集るといふがこれは少しまゆづばものである。

ホルンはまた宗教的な意味があり、チベットの銅でこしらえたラツパと同じように宗教的なものをもつてゐる、ホルンをふくのは神に對するささげものという意味もあるが、その神とはキリストではなくゲルマン民族のあがめる一種の多神教とみられてゐる。とにかくホルンは非常に神聖なものとされてゐる。次はヨードルである。うら声を口の中で共鳴させて唱うのをヨードルという。のどの震動を口の中

で共鳴させる。これが音楽家の苦心する点である。スイスの連中は声を口から鼻にかけて震動させるのどがよいのではなく、よい音楽家というものは口のかつこうがよいのである。ヨードルはスイスの名物になつてゐるが、日本の邦楽の中にもこの頭声が入つてゐるものがある。これは日本音楽の研究からきいたから確かである。

これをきいておわかりと思うがアルプホルンの音と似てゐる。音階をとばしてうたつてゐる。アルプホルンを人間が真似してこういう歌が出来たのだと思ふ。

今度は歌があつて終りだけがヨードルになるものをお聞かせする。この伴奏はドイツ語でバックブレットというが、これは昔アラビア方面の楽器であつたものが、十字軍のころヨーロッパに伝えられオーストリア、ハンガリー、チロル、スイスにかけこれが現代も残されてゐる。これはイギリスでもかつてゲルシュマーといひ残つてゐたが、これが現在の楽器の王といわれるピアノの原形である。これがバッハのころチェンバロとなり、十八世紀の終りから十九世紀のはじめにピアノとなつたのである。

まことに田舎くさいいいものである。これを日本で真似してゐるものもよいが、やはり日本の山では西洋の真似をしてはにあわないようだ。これはフォークウエーズというもので、世界各国の民族生活の中の歌を録音して集めてゐるものである。ソングス・ダンス・ア

インド・スイツランドというレコードで希望者は手に入れることが出来る。このほか世界各国の山の人の歌もレコードに入っていると思うが今度は間にあわなかった。今度はこれらを芸術的にしたチロールの民謡・フランス・ウインラトリオといふ三重唱をやる。あまり上手でないところに面白味がある。この曲ならどこかで聞いたことがあるかと思われ方もあるだろう。伴奏はギターである。曲目はハイム・ウエルツの「家路をさして」である。

近來山居会の東京支部で歌を唄う会をやつておられるが、日本人の歌の欠点はリズムが悪いということである。歌に乗れない。私どものように年寄りで足がふらふらしているならリズムに乗らなくても話はわかるが、若い人がリズムに乗らないというのは解せない。いまの歌が下手は下手なりにきけるのはリズムに乗っているからである。歌はリズムにのつて歌つていただきたい。

もう一つチロールの民謡で「家路をはなれて」というのをやつてみる。これは独唱がついている。

ところでこれはチロールにある民謡をこのように形に編曲してあるのだが、この面白さの中で、その民謡そのものの持つてくるもの、その内容と、加工した人の割合をとつてみると、前者の方が遙かに多い。民謡に手を加えるのが下手であつても民謡そのものが美しいから面白いので、こういうものは本當の音楽とはいへない。例えば中山晋平氏が日本の民謡の曲を選んで手を加えたというものと、ペー

ト・ヴェンが本當に頭の中で考え出したものと、同格には置けないのである。このレコードで少しジャズ的なところのあるのは外国の観光客を楽しませるために作つたからではあるまいか。

次に自然に対するノスタルジアをかき立てる音楽としてダンディのフランスの山の人のうたによる交響曲をおききねがいたい。ダンディは非常に長生きした人である。大體音楽家は頭を使うので寿命は短いのだが、彼は八十才の長寿を保ち、死ぬ六か月前まで指揮台に登りオーケストラの指揮をしていた。豪族の出で、子供の時分きいた音楽が忘れられず、それをもとに大きなシンフォニーを作つた。フランスのセペンヌ地方の歌を主題にしたもので、全篇を通じてはじめのふしが姿を変え色々にして出てくる。どこにもソツがなく音が非常に美しい。聞きようによつてはピアノ協奏曲といつてもよいほどピアノが出てくる。

オーケストラ指揮はアンドレ・ケルリタン、オーケストラはパリ音楽団オーケストラ、レコードはイギリス・エンジェルだから録音は非常によい。フランスの山といつてもそれほど高いところではなく、日本でいえば丹波高原のような牧歌的な美しさをあらわしたものである。

これを文学的に解釈すると子供の時の楽しかった日をこいう音楽で具体化したものといわれている。

なしの楽しさを歌っている。こういう音楽がフランスで出来るなら日本でも木曾ぶし、佐渡ぶしなどを主題にした音楽が出来るといふと出来ない。日本の現代の作曲家が木曾ぶしをうたい、追分けをうたうかといううたはない。だから日本では出来ない。残念ながら日本では小学校に入る。とすぐ西洋ふうの音楽を教える。これは自分達の国の芸術を高度の芸術にまでおし上げることは出来ない。何時までも日本で西洋の歌をうたつてゐる時ではないと思う。もう少し、酒をのんだときなどデカションぶしなどをうたわずに、よい民謡を主題にした音楽を作り出せるような時が来てもよい。来るのではないかと思う。西洋では民謡と芸術とつながっているのだが、日本ではここに断層が出来ている。

山の人の音楽を高度な芸術にしたものが今の音楽である。ところが私のようなウェットな昔に山登りをしてきたものにはこのごろの若い人の登山かたはドライにみえてならない。登山用具の試験をしに山にのぼつてゐるようには思えない。小島鳥水さんの日本アルプス全四巻とか田部重治さんの山の本、あるいは大島亮吉君の神津牧場の文章など実にウェットで、ばらばら。今の若い人の登山は記録の山を楽しむに行つてゐるのかどうかわからないほどである。こういう登山は私はこのまゝない。山登りというものはウェットであるべきだと私は思つてゐる。私のようなウェットな山登りをしているものはペー・ト・ヴェンの第九の

第一楽章などは非常にたのしい。この第一楽章ははじめから主題を出さず、断片的に出して、そのあけつづりの中からはきれいな音楽がきこえてくる。シェトラウスのアルプス交響曲より、より多く山登りらしいものを感じる。

これは日本でプレスしたエンジェル盤のフェルト・エンジェル指揮の山登りの音をどこかでみつけていたきたい。本當に山登りがしたくなる。もう一度山にのぼりたい意欲にかられる。それではこの音楽をやつてみる。

この中には非常に高い音から低いところへ移つていくところがある。いろいろある。またタイコ・ダダダという音で雪崩の音をあらわしているかと思ふ方があつても知れないが、そう感じるのにはまちがいで、これはどこまでもペー・ト・ヴェンの考えである。人によつてきき方はいろいろあつてこは小川の流れたと想像するのは勝手だが彼はこういう音をなか立ちとして人間を愛する考えをあらわそうとしてゐたのではあるまいか。彼は人間を愛した人である。ペー・ト・ヴェンの音楽は人間愛の音楽である。ヒューマニスティックな人間がはじめて山を愛するのである。だからペー・ト・ヴェンと音楽と山とはなれてゐるものはない。

最後にサン・モリッツの山の音楽をきいてペー・ト・ヴェンでこつた肩をときほぐして私のなしを終わりたい。これは村の楽隊のやつてゐるダンスの音楽である。ペルトリという儀式の出でくるなかなか楽しい音楽である。(文責在編者)

鳴瀬川から船形山

船形に行つて来ました。

登りは鳴瀬川、下りは後白髪山を通つて定義如来へ、鳴瀬川源頭は、未だ記録を見たことがないといふので大いにパイオニア精神を燃やして分け入つたのです。

署のトロッコが走りまわつた。しかもカンジンの本流、朝日沢は流も一つしかなかく極めて平凡な流れて沢の中、一泊で頂へ出ました。この登高線のしわでは、ハコがありそうだが、と見当をつけたところも一向に狭くない、あんまり変化がなさ過ぎるので、三人共飽きてしまひ、背中の重荷に笑われるばかり。

最初のキャンプ地はわざわざ釣れそうな場所を選んだのに岩魚は一匹もひつかない。でも、見事な月が夕日沢を区切る稜線からのぼり、翌日の船形山頂の夜をてくれ、お蔭でわれわれのアイヌの火も何時までも消えやらないという具合でした。

会報一六九号に沼井さんが、層から船形を越した一文を書いてましたが、あの時と変らず、人、一人にも会わぬ静かな山でした。トロッコ道から分れて朝日沢をつめ終るまで、所要時間九時間。

(大橋克也)

会報に原稿をお寄せ下さい

編集子の怠慢により会報は何時も原稿難です。会員通信、紀行、随想なんでもご寄稿下さい。

わが山の生涯

を讀む

藤島 敏男

ロングスタッフ氏といえばヒマラヤ探検、登山の大先達。一九五五年に刊行されたケネス・メースンの「アポロ・オブ・スノー」の索引をみても、このヒマラヤ探検登山史の集大成ともいふべき著者のなかで、ロングスタッフ氏は広い範囲に活躍している登山家は他にないことが、よく分かるのである。ヤングハズバンド、フレッシュフィールド、コンウェイ、ケラス、ブルース、ラットレッジ、アブルツチらの先駆者の中でも彼のように、大ヒマラヤを広く探り歩いたのはまれである。

一九〇五年に既にナンダ・デヴィの内陳を窺い、一九〇七年にはトリズル（七二〇〇米）に、最後のキャンペーンが一気に六千呎をよじて初登頂に成功し、この登頂記録はその後二十数年間も最高のものとして、榮譽を持続したものである。このような輝かしい業績をあげていながら、英国山岳会誌や王立地学協会誌に寄稿することはあつても、ロングスタッフ氏は一九五〇年七十五才になるまで、まったく著書を世に送られなかつたために、われわれはその業績も、登山に対する態度や考察も詳しく知り得なつたのである。

いまここに著者のいうように

「自敘伝のような要素を多分にもち」ながら「アルプスへ二十回、ヒマラヤ地方へ六回、北極地帯へ五回、ロッキーマウンテン、セルカーク山脈及びアラスカへ二回、コカサスへ一回の旅行の記録を収め」た大著に接して、われわれはこの偉大な先駆者の足跡が、アルプスは当然のこととして、ヒマラヤ以外に、想像を超えるほど広く及んでいるのに、目を眩はる思いがするものである。「ただ山のことばかりでなく、その自然と大切な関係にある花や動物や住民や歴史のことなど」も、第二回エヴェレスト遠征隊に「医者として、また博物学者として参加した」著者の造詣の深さを物語るように書かれてある。

エヴェレスト遠征に当つてもエヴェレストに登攀をこころみるときもさることながら、チベットの通つてこの山に接近するときの方が、はるかに楽しみが大きいということをわかつてくれるに違いない」という著者が旅行家であり、また「地図の空白部」に惹かれる探検家であることは、この書の随所に窺われるが、コカサス遠征で「二十九日の間に七つの峰を登り、そのうち五つが初登頂」であり、つたり、ロッキーマウンテンは「カナダのマッターホルンといわれるマウン・アツシニボイン」に「私が一生の間にやつた登山のなかで、これがいちばんむずかしかつたと思ふ」ような登攀を試みたりして、果敢な登山家である一面もよく描かれている。著者が接した諸先輩或いは山行を共にした同時代登山家の風格や、あるいは登山、探検

遠征などについての見解が、さりげなく記述されてありながら、さすがはと思わせるのも興味深い。

一九二八年と一九三四年（五十九才）の二回に亘るグリーンランド遠征の章に「私の年齢が高山の登攀を許さなくなつたとき、それにかわつて北極地帯が現われたことは、まことに幸せだつたといわねばなるまい」とあるが、こんなことを書き得る人間は、世界中に幾人いるだろうと思われるような言葉だ。

一九三六年日本隊のナンダ・コート登頂に際してはかつて一九〇五年著者が登頂を志して成功しなかつたこともあつて、浦松佐美太郎氏へ長い書簡を寄せたのが、会報六四号（昭和十二年二月）にのつてゐるが、マナスル登頂についても、この大先達の感想をきいてみたいような気もするのである。

サー・ジョン・ハントはエヴェレストへ出発前に、ロングスタッフ氏から「最高キャンプを、特に隊長自身の重大な責任と考えるように……」といわれたのを、肝に銘じたように記しているが、こういう大先輩をもつ英国登山界の力の強さや底の深さは、やはり大したものだとおもふ。

「わが山の生涯」について書くべき本が、本より人に偏してしまつたようであるが、近來盛んに訳出刊行されて、われわれの血を湧かしている、ヒマラヤ巨峰登頂記とは全く趣きを異にする、いわば滋味溢れるこのような本が、われわれの座右に送られたことは、大いなる喜びであるといふば充分である（わが山の生涯・ロングスタッフ著・望月達夫訳・一九五七年一月・白水社刊・四四八頁・写真二十三葉地図十六葉・五八〇円）



会員通信

続・南極だより

木下 是雄

お手紙ありがとうございます。南極大陸を去る月に砕氷船スターテン・アイランド号から輸送艦ワイアンドーフに乗りかえたのですが、手紙はみんな前の船の方に廻されたらしく、最初の寄港地ブエノスアイレスで入手出来たのは貴簡だけでした。ニューヨークF.P.D.の手違いで運よく誤配されたものとみえます。

小生の手紙、会報にお届け下さつたことですが、あれにはたしか Ventisquero の氷河が云々という文句があつたはず、あとで聞いたら Ventisquero はスペイン語で氷河の意味の由、全文掲載は汗顔です。

多分朝日に送つた記事でござんのことと思いますが、私の感じでは、こんどのように沿岸基地の設営が目的の場合は南極遠征のエッセンシャル・パートはアイスナヴ

イゲイションだと思ひます。砕氷艦の艦長の仕事は大変なものです。しかし上陸してからの氷上の行動や設営は hidden crevasses and cracks & white-out の危険はあるにしても、山のぼり屋の常識の水準でいへばそう難しいものとは思いません。もちろん奥地に入つた場合は別でしょうが……。

基地建設中には私は極地行八回という爺さん（六十五才）Oke Shoshoo と一諸にスキー・パトリールをやつていました。隊の行動区域内の crevasses and cracks に対する daily watch です。

この爺さんの馬力には驚嘆しましたし、雪の下の割れ目を探し出す勤にはたしかに一日の長があつて大いに勉強になりました。毎日歩きまわつていたので人眼にとまつたらしく、ワイアンドーフに乗りかえたら士官連中に No. 1 skier of the expedition がきたと歓迎されました。

お手紙に「いよいよ本論に入つたところだろう」とありますが、こんどの旅行は序論やむすびが無暗に長くて本論はあつたという間でした。結びに入つてから半月以上たちましたが、まだこれから二月近く続々わけです。三月末 North Pole 着、USA の中をまわつて四月二十五日ごろ帰国の予定です。皆様によくお伝え願ひ上げます。（三月八日・日高副会長あて）

寄 贈

マアルバム 六冊 沼井鉄太郎氏
 △同 右 三冊 神谷 恭氏
 △冷蔵庫 一個 神谷 恭氏

日大山岳部会報十三

巻頭の「富士山以降」(平山善吉)で二十七年冬の穂高コブ尾根以降二十九年冬の富士雪崩遭難から遺体発見にいたる間の部の運営とその内面的苦心にふれている。記録は二十九年年度、および三十年年度で、三十一年三月極地法による剣岳西面からの八ツ峰、源治郎尾根の報告は注目をひく。熊谷リッダー以下九名の隊は三月十六日馬場島に集結、早月尾根より天幕を進め一五五〇米にC1、二二〇〇米附近C2、二十七日剣岳頂上にC3を建設、池ノ谷乗越に設け雪洞をC4として三十一日二名で五、六の谷から八ツ峰上半を登攀四月二日二名C3から尾根通し源治郎尾根第一峰往復に成功をおさめている。早月尾根からの八ツ峰、源治郎尾根登攀は戦前慶大山岳部によつて行われたが戦後は昭和二十八年春の立大につづいたもので、そうざらにある記録ではない。

この他「雪崩机上談議」(金坂一郎)も雪崩について新しい角度から検討が加えられている。雪崩の危険というものは昔から叫ばれてはいるのだが、それに比例して雪崩の研究、特に山登りとの関係における雪崩については、殆ど昔から何の進歩もないというのが現状だけに、金坂氏の一文は貴重なものといえる。新雪雪崩、雪崩事故の統計、遭難の概況、積雪量、遭

難の月、時間、天候などについてくわしく述べられている。(山崎)三十一年九月日大山岳部発行、十六頁、非売品

赤城 画 帖

高村光太郎著

むかし木暮さんの「山の想ひ出」を出してわれわれをよるこぼした童星閣の沢田氏は、近ごろまたいい本をつぎつぎと出している。これらその一つ。

明治三十七年の七月、当時二十一歳の光太郎が沼田から赤城山にのぼり、三月あまりを山上にくらしたおりの素描二十八点と、山にすむ美しい乙女とのかなしい恋を歌った相聞歌四十六首とを収めたほか、その頃「明星」に発表した「赤城山の歌」十九首をのせ、猪谷六合雄さんの解説を添えてある。

素描は沼田から眺めた赤城山をはじめ、鈴ヶ峰(岳)や荒山など當時はもちろん今日でもあまり足の向かない方面を主として描いてあるのが面白く、大洞の猪谷家のあたりなどその頃のおもかげをほうふつさせて、六合雄さんに感きわまる解説をつづらしめているが、大正の初年にはじめてのぼった赤城がやみつきになつた私などにとつても、たえがたくなつかしい記憶をよび起すのである。

相聞歌は「めづらしく都より来り宿れる画家の年若き」が、ひと夏の山ずまいに「水清く山高き赤城のいただき、白樺、林なせる所にすめる少女」と相契つて、都に仮つても慕情はつるのばかり、遂にはかなしい悲恋におわる。「智恵子抄」の著者のわかき日のすがた

である。幼いときから赤城の山をわが姿とし、これらの画と歌に描かれた主題を熟知する猪谷さんの解説はいきいきとして、その間に限りない追憶と感慨とをおこし、この今まで殆んどだれにも知られなかつた、巨匠の若い日のころをうきほりにして、われわれに見せてくれるのはありがたい。用紙印刷装幀とも例によつて意を用いてあるのはうれし。

昭和三十一年十月二十日電星閣刊、四六版、二八頁、図版二八普通版二八〇円

山 恋 の 記

村井米子著

著者はあとがきの中でこういつている。

「山恋うる日々もやがて四十年人間に裏切られた経験はあつても山には幻滅を覚えたことのない私は、山を識る人が一人でもふえれば、それだけ世の中が明るくなる」と信じている。だから声をかきり

に山の讃歌を謳いつづける……四季を通じて広く山を歩いている著者の随筆集は何時ものながら軽快な筆のこびで、山の美しさ、楽しさというものがしみじみと心にふれてくる。春、夏、秋、冬と折にふれてものされた紀行と随筆だが、北海道から九州まで克明に歩をしるしている著者の山への情熱の強さに打たれる。

雪解の神河内、穂高岳の中の一節「四月末の雪解の脱たる霧きがひびき、森の下に熊笹が日ごとに

青く顔を出すころの神河内の、すがすがしき、みずみずしさをより高く評価する者だ。梓川の河畔に立ちならぶ化粧柳の、あの、樺太と神河内だけにあるという植物の、春の芽ぶき、燃えるような紅の芽があざやかに空気を染めて、雪白い川原に映える華かさを何に譬えたらいいだろう。三十一一年七月河出書房発行、写真二葉、新書版、二〇九頁、定価一三〇円

名須川渡氏を悼む

昨年の暮、歳末の騒音をさけて御殿場に滞在していた私は、或る朝、新聞紙上に名須川君の訃報を見出して、わが目を疑うほどであった。偉丈夫ともいえる立派な体格の持主で、年令も若い(五十二才)君の急逝は殆んど信じられないことであつた。

故人と私は相識つて年久しい友人であるが、そもそも初めて名乗り上げたのは、いつの頃か思い浮ばない。たゞ昭和六年二月に名須川君がJACに入会したときは額田敏、伊藤秀五郎の両君と私が紹介者となつていたので、それから間もない小集会席上か、虎ノ門のクラブルームで知り合ったものであろう。思えば永いつき合ひであつた。

年が明けてから令弟浩君に会つて、故人生前のこと々々をきき、登山記録を丹念に認めたノートや遺された山岳文献の目録などを借覧するに及んで、惜しい山仲間を失つたの感をさらに深くしたのである。

ある。

故人は中学校時代、高校時代(松山)は山に心をひかれながらも、水泳、陸上競技の選手に引張り出されて、思うに任せなかつたようだが、大正十一年夏の阿蘇、石鎚に始まり、東北大学(数学)に入つてからは、東北の諸山、北海道のスキーなどを試みる傍ら、中部の高岳にも足を入れ、だんだん山のとりことなつていったようである。東京大学(建築)に転じて、山への熱は高まるばかりで、秩父、上越、北アルプスなどへ、四季を通じて、よくもこうまめにしかけたものと思われるほど、それもしばしば単独で登つてゐる。学窓を出てからは勤めの関係もあつたが長い山旅を試みる機会も少なくなつたようだが、雪中露営の研究を始め、八ヶ岳、富士、谷川岳唐松岳などにおいて幾度かこれを試みている。しかし青年時代に東北の山々の味を知つたからでもある、中部の高山だけに對豊を限らないで、日本の中級山岳のもの独特のよさを、故人は充分に体得してゐたことが記録の上にも窺われる。またその登山記録は一九二二年から一九五六年(四月八甲田山、五月鳥海山、十月那須岳)まで、敗戦直後の二三年を除いては、絶えることなく長く息のつづく山登りであつた。

これらの点ではわれわれの先輩の遺したものを享け継いだひとりといえるであらう。

名須川君は私と顔が会うと、よく山の本の話をした。エヴェレスト登頂の年だったか、エヴェレストに関するものは第一回遠征報告

から全部揃っている、嬉しそうに語つたのを私は忘れない。故人の興味はヒマラヤにあつたらしく、コンウェイ、ノーマン、コリーなどの古いものから、メイスンのアボールド・オブ・スノーまで、最近の巨峰登頂記も含めて中々沢山集めてある。またウェストンのジャバニーズ・アルプスを加えてあるのも名須川君の人情が偲ばれる。邦書も根気よく漁つておいたものらしく「山岳」のごく古い号も随分集めてあり「日本風景論」の初版、小島鳥海「扇頭小景」同「木蘭舟」「日本アルプス」全四巻と、こう挙げただけで、ただの本好きというよりビブリオマニアの域に達していたことがよく分かる。「日本アルプス」は一冊々々と集めたらしく、最後の一冊など、本屋の棚にあつたのを忘れられず、夢にまで見るほどだったと令弟から聞いたが、こういうこともJACでは、先輩から山登りと共に伝わってきたひとつの気風だともう。

故人は本会に入会後、会に対して深い関心を寄せていたひとりであつて、クラブルームへもよく顔を出したし、小集会その他の会合にもよく出席していた。会報にも通信を寄せることしばしばであつて、七三三、八四四、百号、一一七号、一二一号などに楽しい冬山の便りを書いている。百号の「内蒙紀行」は、巧みなスケッチと採集した民謡の譜を入れて、故人の趣味の広さを偲ばしめるものがある。相会しても多くを語らず、会合でも黙々として表面に出ない人であつたが、JACに漂う雰囲気をつかり身につけたような、在籍二十五年の古い会員のひとり名須川君を失つたのは、会にとつても残念なことである。私個人としては昨年六月マナスル遠征隊帰国当日、毎日ホルスの歓迎会で隣りに座して、マナスル登頂の喜びを話合ひ、名須川君から「スイスへ出かけたが便法はないだろうか」と相談されたのを覚えてゐる。恐らく故人が最近熱を上げていたスキーを、アルプスの氷河に走らせかけたのだらう。それが故人と私との最後の面晤となつた。

頻繁に往来しなくても、どこかで会えば、心おきなくなんとなんとなん話を、サラッと別れてしまふが、何かの拍子に彼はどうしてゐるかなと、頭をかすめるような友達、そういう温かさを持つ味のある友達であつた名須川君が、今や亡き人となつたのを私は本当に淋しくおもふ。

(一九五七年三月 藤島敏男)

山日記検討会

一九五七年度版山日記に対する批判、検討会を二月十二日ルームで開催した。

出席者 武田、深田、望月、吉沢、田辺、藤木、杉本、折井、金坂、石坂、山崎

編集者側 松丸、春田、坂本、小笹、朝倉

A 昨年までであつた不正確な高山植物の項がなくなつたのは大変よいことだ。日本山岳会の沿革のところで山岳会がウェストン師の援助によつて出来たとあるが、援

助というとか財政的な面でも受けたのかという印象をうけるからこれは声援とでもすべきである。それから今年は概念図が大分少くなつてゐるようだが、これは高山植物の説明より必要なのではないか。

B 概念図はダブルのほうがいいものがある。行程表に入れたのでへらしたものである。

A 今年のものをとみただけだが、地名が變つてゐるものがあるようだ。僕は山日記は虫メガネでなければ読めないのだが、例えば上越国境のところでは白毛門の上に笠ヶ原とあるのは笠ヶ岳であるまた清水峠のところは小屋が二つ書いてあるが、上の観測所は破れていまは使えないのではないか、北アルプスの図の中では冷地とあるのは冷池だ。一九一頁に坊主沼温泉とあるが、ここに温泉があるというところは聞いていない。小屋のまわがいろいろ。そのほかこまかい誤りは沢山あるが綿密に調査出来ていて非常に参考になる。

C こまかくみるとミスが非常にあつて申しわけなく思つてゐる。北アルプス行程表の中で槍ヶ岳の時間が登りと降りと反対になつており、一四九頁でも仙水峠と甲斐駒の登りと降りの時間が逆になつてゐる。

A 一五二頁の北海道のスキー行程表のところでニセコアスプリと見出しがあり、中にはニセコアスプリとなつてゐる。地理調査所がニセコアスプリと出しているのがどうなつたのだらうが、大体地理調査所というところは地名について出したらめばかり書いてゐる

ところで信用出来ない。正確にはニセイコアスプリである。地名については山岳会がつとめて正しいものになおしていかなければならないと思う。

D 山岳用語の項は大変よいものだ。私の学校では山岳部の新人のテキストに載っている。ただ校正とともに内容にも誤りが見受けられるようだ。

E 一三三頁のターグをチベットの語としてあるが、これはトルコ語であると思う。一三〇頁のダウラーギリもチベット語ではなくサンスクリットで、これは誰かが誤つて原稿に手を入れたらしい。

D 一七頁にアルパインクラブと俗稱してゐるというのも変ではないか、一九九頁グイブラム・シュューズは氷にも摩擦力が大きく、靴底より万事にすぐれているように書いてあるが、日本の山では一般には鉄靴の方がすぐれていると思う。一三八頁のホルドのところであるべく目の高さより低いところにあると書いてある

が、目の高さより低いところにホルドを求めていたら岩登りは出来ないではないか、それから今西寿雄氏の書かれています積雪期の山の項の中だが、六頁の板状電扇の説明がおかしい。蝕雪と凍結がくりかえされて板状雪崩をおこすというところは今まで書いたことがない、こういう点は正確に書いてほしいものだ。

F 板状雪崩というのはいわゆる今西錦司博士のいわれる風成雪雪崩のことだらう。私もこの説明はふに落ちない。

G これも積雪期の山の項だが終りのところで極地法登山などは意味がないと書いてあるが、この書きかたもおかしい。それぞれの団体や個人によつて考えかたがちがうのだから、一方的にこういう書きかたをするのはあまり感心しない。極地法登山云々についてはより慎重に書いてほしいかと思ふ。この部分はよいものなところである。山日記というものはもとと普遍的な書きかたをしてほしい。

H 用語の中に人名が入つてゐるが、この人名は編集で選んだのか。

B その通りである。日本人は除いた。山岳用語ははじめ山岳小辞典とするつもりであつたが、そこまで手がまわらなかつた。

C 斬新な内容で毎年原稿を変えていくというところにむずかしさがある。内容はそう変えず書く人を毎年変えねばならないので編集はやりにくい。そこにゆきづまりがある。

I 新しいテーマで書いたらどうか、例えば極地法登山なら極地法登山、あるいは山と酸素とかいふのもで書いてもらつたら面白いのではないだろうか。

D わかりやすく書いた山登り全般の注意というのもあつたらよいと思う。それから気象は昨年はなかつたが、今年は入つてゐるので非常に役に立つ。これがなかつたら山日記の意味がない。

I 山とスキーの項はいいものではないか、岩登り技術のことではなく、スキーのことばかりくわしく書いてあるのはおかしい。スキー登山の注意程度でよいのではないかと思う。

B スキーは季節的なものだから販売政策上特に入れたのであるが、そういえばいらぬようである。

J 記入欄が少いが何とかならないか。

B たしかにその通りである。少いという投書も沢山もらっている。投書をもらっているのは大体二十前後の若い人が多い。

K ザイルの結び方なども、余り使わない方法を図入りで説明してあつたら便利ではないかと思う。

B どうも色々ご意見を感謝する。今後よろしく願する。

会務報告

二月役員総会 十四日(木)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、日高副会長、理事折井、小原、金坂、太田、石坂、徳久、山崎、評議員神谷渡辺、沼井、村井、岩永、成瀬、監事石原

▼議事

①国体の件 静岡県では山岳を正式種目としてとりあげることに決定した。実施要項はとりあえず六コースを選びのせておくことにした。現地では五月ごろ全面的に再調査してみたい。(金坂)

▼報告

①山岳の件 五十年はすでに再校まで済み、二月末までには出せる見込みがついた。これにつづいて山崎理事が五十一年を直ちに着手

している。(折井)

五十一年は私がやることになったが、原稿も大体集まつており、あと植さんの原稿だけいただければ印刷にまわせる。あまりこらずにとにかく出すというところに重点を置き七月ごろに会員諸氏の手もとにとどけたい。(山崎)

②二十八回毎日スポーツ賞授賞の件 マナスル登山隊に毎日スポーツ賞が授与され、植さんが代表してここにある置物をもらつた。(小原)

③上高地ダムの件 言論機関を動員して反対運動を展開することになつてゐる。来るべきウエストン祭を利用しその気運を高めたい。(神谷)

正確な資料をもとに土木と電気の専門家によつてはつきりした反対のデータを出してもらおうと思う。ただ風致保存上というのでは弱いし、討論会にしても賛成派におさえられるおそれが多分にある。東京電力と通産省によく反対理由を説明したい。(別宮)

④会員名簿の件および月例会計報告、名簿は会員に無料配布することにし五月ごろ出したい。会費の値上げも今後検討してみたい。(太田)

三月役員総会 十九日(火)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、日高、松方副会長、理事小原、折井、太田、金坂、村木、松丸、羽鳥、徳久、石坂、山崎、評議員渡辺、神谷

村井、岩永、沼井、藤木、監事石原、木津富山支部長
開会に先立ち辰沼、小原両理事から明大の白馬岳、立大の神威岳遭難の経過報告あり。

▼議事および報告

①三十二年度理事推薦の件

別宮、松方、日高、辰沼、小原、折井、金坂、松丸、太田、徳久、村木、大塚、浜野、田島、羽鳥、石坂、山崎の十七名を三十二年度理事に推薦。会員総会は四月二十日(土)と決定する。

②英国山岳会百年祭招待の件 十一月六日ロンドンで行われるアルバイン・クラブ百年祭に招待されたので、外貨の枠が取れば誰か出席させる。

③ブラヴアンド氏歓迎会の件 日瑞間空路開始の招待で瑞西からサミュエル・ブラヴアンド氏が四月五日に来日するので、同氏の旧知ならびに山岳会有志により四月七日麻布マンションで歓迎会を開催する。

④月例会計報告 (太田)
第一七五回小集會 二月二十六日
体協会議室で別項の通り辻莊一氏の山の音楽についてのレコードによる鑑賞会があつた。

昭和三十三年三月廿五日發行

東京 都千代田 區
神田 駿河臺四ノ六

發行所 社団法人 日本山岳會

編集者 山崎 安治
頒価 二十円
電話 神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂